過疎、国際視点で実感

京大、アジアの大学生ら招きフィールドワーク

過疎化をグローバルな視点で捉えようと、京都大がアジアの大学生や大学講師を招き、宮津市内でフィールドワークに取り組んでいる。最終日の６日に同市小田の上宮津地区公民館で研究成果を発表する。

地域住民らに手ほどきを受けながら桟俵を作るブータンの大学講師（右）＝宮津市小田・旧上宮津小

地域を舞台にして学ぶ大学を支援する府の「1まち1キャンパス事業」の一環。京大は２０１６年から同市で活動しており、今回はブータンの大学生や大学講師４人が参加している。

宮津 灯籠の桟俵作りなど体験

ブータンは近年、都市部への人口流出が急速に進んでいるといい、京大連携助教の赤松芳郎さん（34）は「『過疎先進国・日本』で、リタイア後も地域の中心的な役割を担う高齢者や、若年層のUターン者、Iターン者の姿を知ってほしい」と話す。

初日の2日は同市小田の旧上宮津小で、灯籠の底部「桟俵」作りを体験した。桟俵は農閑期の仕事として作られ、上宮津地区の住民も製作に携わっている。住民らから指導を受けたブータンの大学生らは初めはぎこちない手つきだったが徐々に慣れ、手際よくわらを編んでいた。

最終日までに、大学生らはIターン者らが活躍する由良オリーブ園（同市石浦）や飯尾醸造（同市小田宿野）などを見学する予定。

ブータン王立大シェラブツェ校2年チョキ・ワンモさん（19）は「日本では国や地域がどのように過疎化という課題に取り組んでいるのか、研修で学びたい」と話した。（天草愛理）

2018年8月4日　京都新聞掲載

京都新聞社
The Kyoto Shimbun Co.,Ltd.
©京都新聞社　無断複製・転載を禁じます